

第1回（令和5年度）旭川市内小学生『民生委員・児童委員』作文コンテスト

**「家族っていいな、あいさつするのって、
ご近所さんと、自分って」など、身近な
できごとを、自分の考えで、自分の言葉で
表現してみよう！！**

（入賞作品集（1 1 編））



旭川市民生委員児童委員連絡協議会

【目 次】

□最優秀賞	「お互い様」の気持ち -----	1
	北海道教育大学附属旭川小学校 五年 本 間 明 華	
□優秀賞	地域の関わりを大切に -----	2
	旭川市立旭川小学校 六年 武 藤 歩	
□優秀賞	ぼくが地域のためにできること -----	3
	旭川市立神居東小学校 五年 青 木 慧 悟	
□優秀賞	支え合いの輪を広げよう -----	4
	旭川市立神居東小学校 六年 佐久間 安 里	
□優秀賞	僕に今できること -----	5
	旭川市立愛宕東小学校 五年 宮 田 桜太朗	
□優良賞	ご近所さんや地域の人との助け合い -----	6
	旭川市立大有小学校 六年 鈴 木 野乃香	
□優良賞	地域の人との関わり -----	7
	旭川市立大有小学校 六年 黒 崎 涼 永	
□優良賞	あいさつがくれたプレゼント -----	8
	旭川市立東栄小学校 六年 牛 島 恵	
□優良賞	優しい近所の人たち -----	9
	旭川市立忠和小学校 六年 中 野 奏	
□優良賞	障がい者へ届ける未来と笑顔 -----	10
	旭川市立共栄小学校 六年 内 山 千 彩	
□特別賞/旭川市長賞	ぼくのおばあちゃん -----	11
	旭川市立永山南小学校 五年 赤 石 龍 雅	

□最優秀賞□

「お互い様」の気持ち

北海道教育大学附属旭川小学校 五年 ほん ま あす か
本 間 明 華

冬休み中、大雪の日がありました。夕方、私を習い事にする母の車が家から数メートルの所で埋まり、動けなくなりました。通りがかったお兄さんドライバーが、「大丈夫ですか。ハンドルをまっすぐにして、一度バックをしてみてください。」と、声をかけてくれました。除雪中の近所の人たちも、スコップやヘルパーを持ってすぐに集まって、タイヤの前をほり、後ろから車をおしてくれました。お陰で母の車は脱出し、無事に家に帰ることができました。

私は新しい家に引っ越して一年になったばかりで、近所にどんな人が住んでいるのか、あまり知りませんでした。けれどこの出来事をきっかけとし、自分と町内に住む人たちの関わりについて考えるようになりました。

向かいに住む私の祖父は、長く町内会長をして、今も顧問として町内の仕事に携わっているのです。町内のことを詳しく知っています。散歩中の人と立ち話をしたり、近所の子どもに家庭菜園のミニトマトをあげたりしている様子をよく見かけます。私を紹介してくれることもあります。知らない人と話す恥ずかしさもあり進んで関わることはありませんでした。

夏休み、祖父に誘われラジオ体操に参加しました。若いお父さんがお手本になり、スタンプを押しお菓子を配ってくれました。子どもの他に、お年寄りの方もたくさん来ていました。祖父が、「青年部の人たちが頑張ってくれているから、うちの町内会は参加率がとても高いよ。」と、誇らしげに言っていました。他にもごみ拾い、七夕、夏祭り、新年会など色々な町内会行事が、長く続けられているそうです。祖父が町内会のモットーは、「安全、安心、親睦」と教えてくれました。私の住む町内でも、明るく楽しく安全に暮らせるよう、皆で協力して町内会の運営をしていることを知りました。

お正月、能登半島で大きな地震のニュースがあり、倒壊した建物の下敷きになり亡くなった人や、避難所で身を寄せ合う家族の場面をテレビで見て、心を痛めていました。そんな中、ある鮮魚店が、「ご自由にお使いください」と、井戸水を解放しているニュースを目にしました。また、消防、自衛隊が行方不明者を探す際、「あの人は、この部屋で過ごすことが多かった。」という近所の声が救助につながることもあったと聞きました。被災地で、皆で助け合い危機を乗り越えようとする人々の姿から、普段のご近所付き合いや、声かけの大切さを教わりました。

あの大雪の日、お礼を言うと、「お互い様ですから。」と答えたドライバーの方の言葉が心に残っています。これから私も、近所の人に明るく挨拶をしたり、困っている人がいたら、「お互い様」の気持ちで気軽に声かけをしたいです。町内行事にも積極的に参加し、お手伝いをしたいと思います。

□優秀賞□

地域の関わりを大切に

旭川市立旭川小学校 六年 武 藤 歩 あゆむ

ぼくは、時々町内会の活動に参加しています。その内容は、花だんの花植えや公園の清そうです。参加している人は高れい者が多く、ぼくの知らない人がほとんどです。父の話だとコロナウィルスの流行で町内会のイベントはだいぶ減ってしまったそうです。そのためか学年がちがう同じ町内の小学生でもよく知らない人が多いです。

今年元日、石川県能登半島で大きな地震が発生し、「令和六年能登半島地震」と名付けられました。テレビを見ると現場では、近所の人たちが「早く、にげろ」と声をかけ合ったり、知り合いの無事を案じたりする人たちが大勢いました。また避難所に必要なもの（食べ物など）を持ち寄って助け合いはげまし合っていました。ぼくはそのニュースを見て、「ぼくの町内で同じような大きな地震が起こったらどうだろうか。」と考えました。

もし、この時、近所の関わりがうすいとどうなるでしょうか。まず声をかけるのに勇気がいります。その人がどのような人かよく分からないからです。次に情報交かんができなくて何が起きているのか分からなくなるかもしれません。それに、足りない物があつた時、助けを呼べなくて困ってしまうかもしれません。

では、近所の人たちとふ段から関わりを持っていると、どうでしょうか。近所の人自分が一人のにげられる人なのか、はたまたえん助が必要なのかはあくできます。そうすればにげる時に声をかけたり、助けたりすることができます。家族構成を知っていれば、いない人を探すことができます。近所の人たちとの関わりがあれば、非常事態の時に被害が少なくてすむのではないのでしょうか。またふ段でも、みんなの目が行き届き、治安が良くなったり、住みやすい町になったりすると思います。

地域の人との関わりを持つことはとても大切なことです。だから、ぼくは、これからも積極的に地域の活動に取り組んだり、あいさつをしたりして、人と人との関わりを大切にしていけたらなと思います。



□優秀賞□

ぼくが地域のためにできること

旭川市立神居東小学校 五年 ^{あお}青 ^き木 ^{けい}慧 ^ご悟

ぼくが住む町には、カッコいい大人の人たちがたくさんいる。そのうちの一人は、ぼくの父だ。父は町内会の「青少年育成部長」で、地域の子どもたちのために、いつも色んな活動をしてくれる。

例えば、夏休みにはラジオ体操のお手本をみんなの前で見せてくれたり、スタンプカードにハンコを押してくれたり、参加した後にはおかしを配ってくれる。ぼくはそのおかしをいっしょに買いに行ったり、ふくろに入れたりするお手伝いがとても楽しみだ。他にも、花火大会やクリスマスパーティなど、楽しいイベントが盛りだくさん。そのたびに、父をはじめ、たくさんの近所の人たちがみんなと協力し合い、助け合っている。その姿がとてもたくましくて、ぼくはカッコ良く見える。

コロナが流行った時は、こうした活動がなかなかできなくて残念だったけれど、またできるようになったことが、ぼくはとてもうれしかった。

一月にはいったら、新年もちつき交流会があることを、ぼくは楽しみにしていた。でも、元旦に家族で買い物に行っていた時、母がおどろいた声を上げたので、ぼくはびっくりした。母が大学生の時に過ごした石川県で、大きな地震が起こったからだ。たくさんの人が亡くなった。そして今もまだ、たくさんの人たちが家にもどれなくて、大変な思いをしている。母のお友だちやお世話になった方もまだ、たくさん住んでいる。毎日流れてくるニュースを見ながら、心配している母の様子を見て、ぼくはとても悲しい気持ちになった。

でも、そんな大変な状況の中で、くずれて押しつぶされてしまった家にはさまれた人を、近所の人たちが協力し合って助け出したというニュースを聞いた。「能登の人たちはふだんから近所さん同士で声をかけ合い協力し合って生きている。だから、こうした大変な時にも、おたがい助け合い、支え合う精神が、こうしたきせきをおこしてくれたんだね。」と母が話してくれた。

母の話を聞いて、ぼくはふだんから近所の人たちとつながる大切さを改めて知った。

ぼくが近所の人とつながるために、できることは何だろう。まずは、小学校から預かったお便りを、町内会長さんに届けること。そのお便りが回覧板にはさまっているのを見ると、ぼくはちょっぴりうれしくなる。次は元気よくあいさつをすること。以前はあいさつをしていたけど、最近は少しはづかしくて、あいさつをせずに通り過ぎてしまうことがある。これからはもっと自分から積極的に、近所のおじさん、おばさんと顔を合わせて、笑顔で元気よくあいさつしたい。ぼくの元気な声がみんなにつながって、もっともっと元気になってくれたらうれしい。そして、ぼくがあこがれる父のように、地域の中でも活やくして、人のためにがんばれる大人になりたい。

□優秀賞□

支え合いの輪を広げよう

旭川市立神居東小学校 六年 ^{さくま}佐久間 ^{あん}安 ^り里

ある日、学校から冊子が配られた。表紙に大きく書かれた「みんせい」という文字が私の目に留まった。「みんせい」って何だろう。初めて聞く言葉に興味を持ち、ページを開いてみた。その言葉は、民生委員・児童委員のことで地域を守るボランティアということがわかった。ページの中に「地域包括支援センター」や「社会福祉協議会」など知っている言葉があった。父が家で話していたからだ。ここで一つ疑問が浮かんできた。それは、父の働く施設の方々と民生委員はつながりがあるのかということだ。父に聞いてみた。

私の父は、認知症の方々が生活している施設の介護支援専門員だ。父の職場では町内会に加入していて、入居者の方々と一緒にラジオ体操やゴミ拾いに参加したり、父の職場で会議をする時は、町内会長や民生委員の方にも参加していただき、町内会の困りごとなど情報交換をしているそうだ。

また、父の話によると、こんなこともあったそうだ。地域で暮らす一人暮らしの認知症の高齢者の方がいて、その方は、家の場所がわからなくなって、帰れなくなり迷子になってしまった。それを知った町内会が、大丈夫かと心配になり、民生委員に報告した。民生委員が実際にその方の様子を見に行き、一人暮らしは難しいと考え、地域包括支援センターに伝え、そこから父の施設で暮らすことにつながったそうだ。他にも、認知症の一人暮らしで、家がゴミ屋敷、訪問販売の言いなりになってしまい高い物をたくさん買わされてしまう方がいたが、同じく町内会が発見し、民生委員、地域包括支援センターへとつながり、父の施設に入居したことで、その人を守ることができたそうだ。

父の話を聞いて、認知症になってもその方が困らないように、民生委員などいろいろな人が支えてくれていることがわかったし、私も安心できると思った。母の実家は高齢者三人で暮らしていて、私たちとは離れて生活しているから、困っている時にすぐに行けないかもしれないので心配だ。でも困った時があったら、地域の人が気づき、民生委員につないでくれ、助けてくれるかもしれない。

現在は、民生委員のなり手が少ないらしい。民生委員をしている方々は、相手の立場になって考え、寄りそうことができる、心の優しい方々なのだろう。私も、そのような大人になることを目指し、誰もが安心して生活していけるように、地域の方々と支え合いながら日々を過ごしていきたい。



□優秀賞□

僕に今できること

旭川市立愛宕東小学校 五年 ^{みや}宮 ^た田 ^{おうたろう}桜太朗

僕の家裏には小さな公園がある。サッカーの練習をするには十分な大きさで、夏になると毎日のように友達と行く場所だ。となりにはスーパーがあるせいか、よくゴミが落ちている。ぼくはいつも見て見ぬふりをして遊んでいた。ある日、家に帰ってきてから、飲み終わった水の容器のゴミを公園に置いて帰ってきてしまったことに気づいた。家に帰宅し、くつろいでいた時だったので、もう公園に戻るのをやめた。

心のどこかで、皆が捨ててるからいいだろう。と、そんな気持ちが僕にはあった。いつだって人任せだ。

そんな公園でいつも会うのは可愛い子犬のリンちゃんだ。飼い主の藤井さんはいつも大きな声であいさつをしてくれる。ニコニコしたお母さんだった。毎日のように声をかけてくれて、サッカーの練習をしていることをほめてくれたり、リンちゃんと遊んであげると、いつもお礼を言ってくれた。いつ日か公園で会話を交わすことが楽しみになっていた。

その藤井さんは犬の散歩と同時に袋を持って公園とその周りのゴミ拾いをしていることに気づいた。

ある日、手作りの看板を作り、公園に立てかけていたのを見た。「ゴミを置いていかないでください。」と手書きで書いた、それは決してカッコいい看板ではなかったが、それから少し落ちているゴミが減った気がした。町をきれいにしようと行動している姿を見て、自分が置いて帰ったゴミのことを思い出した。

そうか、誰かの出したゴミは誰かが片付けているんだ。誰かが片付けてくれるという、人任せな姿勢が人任せな社会を作るのだ。

僕もゆうきを出してゴミを拾ってみた。小さなゴミだったけれど、とても気持ちが良いしゅんかんだった。

それから雪が降り、その公園に行く足も遠のいた。藤井さんとリンちゃんの顔もしばらく見なくなった。

ある日、母から、裏に住むその藤井さんが病気で亡くなったことを聞いた。ついこの間、リンちゃんと散歩していた時、あいさつを交わしていたのでとても信じられなかった。

さみしさと悲しみがこみ上げてきたが、僕はすぐに確信した。藤井さんはキラキラ輝く天国に行ったと。もう公園では会えないけれど、きっとこの広い空の上で僕たちを見守ってくれている。

藤井さんは僕の祖母よりまだまだ若くて亡くなった。でも、きっと、藤井さんの周りの人は幸せだったに違いない。人より短い人生だったかもしれないけど、「どれだけ生きるか」ではなく、「どう生きるか」が大事だと思った。僕は今できることを考えた。

今度は僕がこの公園を守る番だ。ゴミをきれいにすることはもちろん、そこでは、あいさつもしっかりしていくつもりだ。

□優良賞□

ご近所さんや地域の人との助け合い

旭川市立大有小学校 六年 ^{すず}鈴 ^き木 ^{ののか}野乃香

皆さんは、自分の周りの地域の人や近所の人について考えたことはありますか。私は、全く考えたことがありませんでした。

私のマンションには、若い方や高齢者の方、外国人の方がいます。私は、小学一年生の時に北海道に引っ越してきました。その当時は、あまりご近所さんや地域の方に興味がなくて気にしていませんでした。北海道に引っ越してきた日、ご近所さん達に挨拶に行くためにお土産を渡しました。すると数日後にお返しが返ってきたり、引っ越してきた時からご近所さん達からすごく良くしてもらいました。

私の隣に住んでいる外国人の夫婦の方は、毎年イースターの日やバレンタインデー、ハロウィンとクリスマスに「アメリカの伝統だからぜひどうぞ。」とプレゼントやお菓子をくれます。同じマンションに住んでいる他のご近所さんとは、会ったら挨拶をしたり、おすそ分けをもらったり、私と妹にお菓子をくれたりしてすごく親切です。

今では、一緒に除雪や家の下が通れるようにご近所さんと協力して道をつくったりなどをして関係が深まりました。

ある日、おばあちゃんが持っていた重そうな荷物をお母さんと一緒に持ってあげました。他にも私のマンションはオートロックで専用の鍵みたいなのがないと家に入れないようになっていて、おばあちゃんが困っていたので聞いてみたら、鍵を家に忘れて入れないと言っていて鍵を開けて助けてあげたら、次の日にお礼として育てている野菜をもらい、すごく嬉しかったです。

また、お母さんが初めての雪道の運転で雪にはまってしまい困っていたところ、家から親切なお爺さんとお婆さんが助けてくれて本当に感謝しました。

このような出来事に地域やご近所さんとの助け合いは大切だなと感じました。現在は、助けてくださった地域の方とは会ったら挨拶をしたりお話をしています。

私は北海道で生活するのは、あと少ししかないけれど、これからもご近所の方や地域の方と協力をしたり挨拶をしたり助け合うなど、今よりもっと関係を深めていきたいです。



□優良賞□

地域の人との関わり

旭川市立大有小学校 六年 ^{くろ}黒 ^{さき}崎 ^{りょう}涼 ^{えい}永

僕の住んでいる地域では、地域の人たちが交代で「見守りさん」と呼ばれる地域の人があります。見守りさんは僕たち子供が安全に学校に登校できるように、とても寒い冬もひどく暑い夏も年間を通してどんな季節も見守ってくれています。そこで、見守りさんたちとの挨拶や関わりがどのような効果をもたらすのかを考えてみました。

私たちが、学校に登校するときいつも見守りさんが挨拶をしてくれます。僕はその挨拶を返して気持ちのよい日常を送っています。

見守りさんが、以前学校に来たときに、見守りさんたちが「子供たちが元気に挨拶をしてくれて、いつも元気をもらっています。」や「子供たちが安全に学校に行けるように頑張ります。」とおっしゃっていました。僕が、学校に登校するとき見守りさんはあのようなことを考えて、挨拶をしてくれているんだ。と初めて思い、自分たちが安全に学校に行けていることは当たり前ではないと実感することになりました。

例えば、集団下校の時など、見守りさんが付き添ってくれることもあります。他にも「こども110番」の家を設けて、児童に何かあったらすぐに助けてくれるようなことをしてくれています。

僕は、そんなことのおかげで安全な毎日を元気よく、テストや大事な行事などがあるときに学校生活などを過ごせていると思います。

緊張している自分を挨拶で元気づけてくれたり励ましてくれるような挨拶をしてくれます。見守りさんは僕たちのことを支えてくれているとわかりました。他にも、僕たちの知らないところで、僕たちが安全に登下校できるかを日々状況にあわせて考えてくれたりしています。

そんな見守りさんに感謝の気持ちはもちろん、見守りさんのような大人になりたいななどと思って、今まで以上に元気な挨拶などをして応えていこうと強く思いました。

これから、中学生・高校生・大学などの進学を経て社会人になっていく上で、地域との関りや見守りさんがしてくれてきたことは次の世代の社会に役に立つと思います。なので、自分になりたい見守りさんのような優しい大人を思い浮かべて、そんな大人になれるように勉強や地域との関わりを増やして、経験を積み社会に立ったときに自分になりたい大人になっていけばいいなと思います。それまでの道を、家族、地域、学校の人たちがしてくれたことを忘れずに頑張っていきたいと思います。



□優良賞□

あいさつがくれたプレゼント

旭川市立東栄小学校 六年 ^{うし}牛 ^{じま}島 ^{めぐみ}恵

あいさつが私にくれたある「プレゼント」。それは「地域の方や友達との良い関係」だ。あいさつをしていたら、良い関係がきずかれていくのだ。

私の近所に、あるおじいちゃんがいる。そのおじいちゃんは私達が学校に登校するとき、よく雪かきをしている。私は、

「おはようございます。」

と声をかける。するとおじいちゃんは、

「ああ、おはよう。」

と言って一度手をとめる。そして、

「今日は道が悪いから気をつけてね。」

などと言そえてくれる。私はとてもうれしい気持ちになる。

そのようなやりとりを毎日していくうち、私はそのおじいちゃんとあいさつをすることが自然にできるようになった。そしてそのおじいちゃんと顔見知りになれた。もう関係が形づくられてきている。ふつうに話ができればここからもっと親しくなるのは難しくない。

これはまぎれもなくあいさつがくれたプレゼントだ。だがあいさつがくれたのはそれだけではない。

私の地域の方々は、あいさつをするとほとんどの人があいさつを返してくれる。そしてあいさつを交わした後、

「声をかけてくれてありがとう。」

と言ってくれるおばあちゃんや、している作業をとめてとびきりの笑顔であいさつを返してくれる方がいる。このような時、私は、スープを飲んだ時の体のようなあたたかい気持ちになり、自然と笑顔がほころぶ。また、相手の方もきっと明るい気持ちになったのだなと表情から考えられる。あいさつが私達を明るい気持ちにしてくれたのだ。

あいさつとは、こんなにもすばらしいプレゼントをくれるものだ。地域の人みんなが明るいあいさつを心がけられるような地域になれば、住みよい地域と言えるのではないだろうか。私は、しっかりと目を見て明るいあいさつをして住みよい地域づくりにこうけんしたい。この文章を読んでくださった方々も、明るいあいさつを心がけてみてはどうでしょうか。きっと、あいさつがすてきなプレゼントをくれるだろう。



□優良賞□

優しい近所の人たち

旭川市立忠和小学校 六年 ^{なか}中 ^の野 ^{かなで}奏

私の近所には、お年寄りから若い人が住んでいます。私はその人たちと挨拶をしたり少しお話をするだけで、そんなに深い交流はありませんでした。

去年の冬にたくさんの雪が降ったことがありました。私の父は単身赴任で、普段は私と母で雪かきをしているため、スノーダンプは一つしかなく、私はソリを使って雪を運んでいました。その様子を見ていた近所の人、「よかったら使ってください。」と丈夫なスコップとスノーダンプを貸してくださいました。さらに融雪溝もぜひ使ってくださいと、とても親切にしてくださいました。普段は、家の裏の庭まで雪を運ばなくてはならず、大変だったのでとても助かりました。このように親切にしてくださったので、次の日お礼をしにいくと「全然当たりまえのことをしただけですよ。」と、わざわざ来てくれてありがとうと喜ばれました。

私はこの時、近所の人たちは、とても優しい人がたくさんいることがわかりました。またその他にも笑顔であいさつをしてくれたり「行ってらっしゃい」「お帰りなさい」と言ってくれたり、さらには、家庭菜園のきゅうりをくれた方もいました。普段の何気ない日常や会話で、近所の人たちはいつも協力をし合って、このような私たちが過ごしやすい地域ができていることに気が付きました。近所の中のお祭りやイベント、そして優しさは、近所の人たちが協力をして出来ていると思います。今では、近所のお年寄りから若い人まで協力し合って素敵な地域が出来ています。

私は、近所の人たちに支えられて、学校に行ったり、友達と遊んだり、楽しく過ごしていることが分かりました。近所の花だんをきれいにしてくれたり、交通安全運動をしてくれたり、私たちが過ごしやすい地域にしてくれているのは、近所の人たちのおかげだと思います。そのため、私も自分から挨拶をしたりして少しでもいい地域になるようにしています。このことを続けていくと、あいさつが多く、近所の人困っていたら助けるような優しさがあり思いやりのある、より良い地域になっていくと思います。



□優良賞□

障がい者へ届ける未来と笑顔

旭川市立共栄小学校 六年 内 山 千 彩

私はこの前、ある一冊の本を読んだ。それは、生まれつき体の発達が遅れていて、何もかもが大変な生活を送っているノンフィクションのお話である。私は文章を読み始めた時、驚いたことがあった。それは、手も足も短い女の子の姿があったからだ。しかし、読み進めていくうちに、どんどん涙が溢れてきた。その女の子は生まれた時から障がいを背負って今までの人生を送ってきたという。だが、人一倍に努力をして、好きなことを精一杯楽しみ、素敵な未来を作りあげてきた、というお話だった。私はその一冊を読んだ時、凄く感動して、心が動かされた。同じ星に生まれた人だとしても、一人一人違う。体が不自由な人だってたくさんいる。だけど、同じで違う未来をもっている仲間だ。その未来は、個性を生かして、作って支え合っている。これからの未来、何が起こるか分からない。それは私たちだけでなく、障がい者もみんな同じだ。笑ったり泣いたりしている人生、誰にだって希望があるはずだ。その希望は誰かに振り回されずに、自由に生きる光となると私は思う。そしてその光が「人権」というのだと思う。人権は私たちが生きている証だ。

その本を読んだ数日後、私は学校で「盲目体験」をさせてもらった。アイマスクをして目を開けてみると、光も感じない暗い世界がそこにあった。その後、友達と校内を一周してみた。けれど、歩くのも走るのも、何もかもが怖く感じてしまって、行動するのに恐怖を感じ続けた。そして盲目体験が終わり、今度は私が目が見えない友達を案内する側へ移った。自分の怖さを思い出して、私は友達に優しく案内した。その時私は、障がい者を案内するのにも責任があるんだな、と感じた。

誰にだって人権があって希望がある。私たちはその光へ走り続けて未来へ近づいているのだ。生きていて辛いな、苦しいな、と思ってしまうことだってたくさんある。だけど、私たちと障がい者のみんなが支え合って生きていけばきっと、明るい未来が将来の自分へ届けられると思う。これから、私は障がい者と出会うことがあったら、優しく助けてあげて、一人一人の個性を少しでも豊かにしたいな、と改めて思った。



□旭川市長特別賞□

ぼくのおばあちゃん

旭川市立永山南小学校 五年 赤 石 龍 雅

ぼくは小さい頃、熱が出ると保育園を休んで、おばあちゃんの家に行っていました。熱が下がって元気になると、おばあちゃんとババ抜きをしました。何回もやって、何回もおばあちゃんに勝ちました。だから、おばあちゃんとするババ抜きは楽しかったです。

ぼくが一年生になり、夏休みになると、自転車でおばあちゃんの家で一人で遊びに行くことがありました。ぼくが遊びに行くと、おばあちゃんが外で待っていて、大きく手を振ってくれました。おばあちゃんは声が大きいので、近所の人に来て立ち話をします。そして、ぼくが近所の人に「こんにちは」と言うと、近所の人よりもおばあちゃんが喜んでニコニコ笑っていました。だからぼくは、近所のたくさんの人にあいさつをしました。

夏休みの暑い日に、ぼくは自転車でおばあちゃんとスーパーに行って、アイスを買いました。おばあちゃんは、帰りにスーパーの入口で近所の人と立ち話をしました。ぼくは、「アイスが溶けたらどうしよう。」と思って、おばあちゃんに腹が立ちました。ぼくは、何も言わないで一人で先に帰りました。おばあちゃんの家のかなめ向かいにある公園で、ブランコに乗っていました。ずっと待っていてもおばあちゃんは帰って来ないので、ぼくはもう一度スーパーに向かいました。スーパーの近くまで行くと、近所の人が「いたよー。」と大きな声で言いました。おばあちゃんは走ってぼくのそばに来て「どこへ行ってたの。」と言いました。ぼくはまだ怒っていたので、何も言いませんでした。近所の人が近づいて来て「おばあちゃんはずっとぼくのことを探してたんだよ。」と言いました。周りを見ると、近所の人やぼくの知らない人もたくさんの人が、ぼくを探していてくれました。ぼくはびっくりして「ごめんなさい。」と言いました。おばあちゃんもぼくに「ごめんね。」と言いました。

家に帰り、おばあちゃんが「いつも近所の人にちゃんとあいさつしているから、ぼくがいなくなった時に協力して探してくれたんだよ。」と言いました。ぼくはもう一度おばあちゃんに「勝手に帰ってごめんなさい。」と言いました。おばあちゃんはだまって笑っていました。溶けたアイスを冷凍庫に入れて、次の日おばあちゃんと一緒に食べる約束をしました。一度溶けたアイスは、あまり美味しくなかったけど、おばあちゃんはニコニコしながら「美味しいね。」と言って、食べていました。

五年生になって分かったことがあります。ぼくはババ抜きの時、ババがくると顔にでてしまうそうです。おばあちゃんは、熱で保育園を休んだぼくが可愛い想で、わざと負けてくれていたんだろうなあと思いました。

ぼくも、おばあちゃんのようにいつもニコニコ笑って、たくさんの人と仲良く話せる人になりたいです。

【講 評】

この度は、市内小学校25校から665編の作品応募がありました。小学校5・6年生の多くの皆さんが今回の作文コンテストに挑戦していただきありがとうございました。作文の内容としては、家族のすばらしさや団らん・絆、近所の人や町内会・地域の人との関わり、高齢者や障がい者との関わり、民生委員・児童委員の活動、いじめ、自分自身のことなど様々でした。皆さんがこれらの内容について真剣に向き合い、自分の考えを自分の言葉で表現していたことに、私たち審査委員はとても感銘を受けました。

さて、最優秀賞に輝いた本間明華さん（附属旭川小）の作文『「お互い様の気持ち」』は、①母の運転する車が埋まり動けなくなったことで、見ず知らずの人や近所の人たちが手伝ってくれ脱出することができたということから、本間さんは自分と近所の人たちとの関わり大切さ、②祖父を通して町内の人との関わりや町内会行事の意義、③能登半島地震のニュースから、近所付き合いや声かけの大切さなどを学んだということです。これらのことから本間さんは、今後、近所の人たちとの明るい挨拶、「お互い様」の気持ちで困っている人への声かけ、町内会行事への参加やお手伝いをしたいと述べています。地域の住む小学生の一人として、「支え合う 住みよい地域」を考え、行動していくとする姿勢は、大人も見習わなければなりません。

令和6年3月1日 旭川市内小学生「作文コンテスト」審査委員長 猫山房良

旭川市民生委員児童委員連絡協議会事務局

会 長 佐 川 徹

住 所（〒070-0035）旭川市5条通4丁目893-1

旭川市ときわ市民ホール内

電 話 0166-56-0150

FAX 0166-23-0746

E-mail siminjiren@asahikawa-shakyo.or.jp